

公教育からこぼれ落ちた 若者たちのための学校——侍学園

日本一涙が止まらない卒業式

2017年3月5日、僕たち取材チームとはある学校の卒業式に参加するため、長野県上田市を訪れた。その日、6人の卒業生の門出を祝うために100人以上の参加者が式場に詰めかけた。学校の名は「侍学園（通称サムガク）」。この卒業式は「日本で一番涙が止まらない卒業式」として、学校関係者の間で語り草になっている。

サムガクの生徒たちの大半は、大きな挫折を経験し、学校や社会からドロップアウトしてしまっただけの人たちである。彼らは「暗いトンネルの中にいた」と、自らの過去を振り返る。恵まれない境遇を背負った生徒たちが、サムガクのスタッフたちに支えられて成長し、卒業していく物語が丁寧に披露される。この卒業式の様子は、参加者の胸をひたすら打つ。

サムガクの卒業式は、情熱と愛情に満ちあふれた理事長の式辞から始まる。ここで早速、参加者は驚愕することになる。理事長は卒業生の名前を一人ずつ呼びかけ、その生徒との出会いから今日に至るまで、学園で仲間たちと一緒に過ごした日々の思い出と成長の過程を、滔々と振り返る。一

人ひとりに向けて、魂から削り出したような熱い言葉を、存分に語り尽くしていく。そして、最後は必ずこう結んだ——「卒業おめでとう、これからもよろしく」。理事長が6人分のメッセージを読み終えたとき、開始からすでに1時間以上が経過していた。これがまた、冒頭の式辞なのである。読者のみなさんにも覚えていてほしい。「一般的な学校の常識は、サムガクではまったく通用しない」ということを。

「生徒とスタッフが共に成長できる。共育。」の実践を

僕が侍学園のことを知ったのは、2015年に公開された「サムライフ」という映画がきっかけだった。「理想の学校」設立の夢へ——27歳、全財産725万円。元高校教師と仲間たちの青春ノンフィクション——そんなキャッチコピーに惹かれて、公開後すぐに劇場に足を運んだ。映画は侍学園の創業者・理事長の長岡秀貴さんが、何もないとこから身一つで学校を立ち上げる冒険譚だ。しかもその学校は「何らかの理由で学校や社会からドロップアウトしてしまった人たち」に居場所を提供し、学校や社会への復帰を助けている。

当時、海外の途上国の学校現場を中心に活動をしていた僕は、「日本にもしんどい境遇の子どもたちが存在する」という当たり前の事実を、この映画を通して改めて認識した。そして、そんな子どもたちのために、20代後半で「学校づくり」を始めた長岡さんたちのストーリーに、心を揺さぶ

られたのだ。僕は映画を観てから長岡さんにファンレターを送り、すかさず彼に会いに長野県上田市へと向かった——これが僕とサムガク、そして理事長の長岡さんとの最初の接点となる。

「なんだ……この先生っぽくない人は！」

第一印象は、衝撃的だった。ジーンスにジャケットのフランクな服装に長髪姿。失礼ながら、いわゆる「学校の創業者」。オーラはまったく感じられない。むしろ「ヤンチャな近所の兄貴」といった風貌だった。

長岡さんは1973年生まれ、長野県上田市の出身。高校時代には野球に熱中し甲子園を目指すも、原因不明の左半身麻痺で車いす生活を余儀なくされた。担当医師からは「歩くことはむずかしいだろう」という絶望的な宣告を下される。そのとき、彼に救いの手を差し伸べたのが、当時の担任だった小林有也先生だったそうだ。毎日病室を訪れた小林先生の励ましとリハビリの結果、長岡さんは日常生活を送れるまでに回復する。この体験を通して、長岡さんは「命のもろさ」を痛感したと、当時を振り返って語っている。「命の壊れやすさに向き合う」という、現在の彼の教育スタンスの原点とも言えるだろう。

その後「小林先生のような先生になりたい」と志を掲げた彼は、「公教育で見放されがちな若者に手を差し伸べ、共に育ち、生きる力を手に入れる学校を設立したい」という夢を持つようになる。小・中・高の教員免許を取得した後、母校の高校で念願の教職人生をスタートさせるも、5年後には退職。「自分で学校をつくる」という夢を叶えるために、2004年春、教え子ら4人とともに

「認定NPO法人侍学園スクオーラ・今人」を立ち上げた。サムガク振揚げの瞬間である。

彼らはけっして公教育と対立する存在ではない。学校や社会への復帰を支援したり、学園が運営する施設や地域企業と連携しながら就労支援をしたりと、一人ひとりの人生の目標に合わせた支援を行う。通学年数に上限はなく、アルバイトの傍ら週に数日学園に通い、数年かけて卒業を目指す生徒もいる。

侍学園は、長岡さんが自らの人生で経験してきた「誰かに与えられる教育ではなく自ら探し、求め、生徒とスタッフが共に成長できる。共育」の実践と、「何かに頼らず、自らの進むべき道を探すための学び舎」の実現を目指している。

揺るぎない学校像、先生と生徒の関係性

さて、いったん話を卒業式の様子に戻そう。理事長の式辞が終わると、今度は卒業生たちが一人ひとり、答辞を読み上げる。不器用ながらも、自分の言葉でこれまでの半生と、サムガクでの学び、そして、これからの抱負を語る卒業生たち。その姿を、地域の住民やサムガクのサポーターたちが、固唾を呑んで見守る。僕は、この式場に立ち込める熱量というか、希望に、終始胸が高まりっぱなしだった。

昨今の学校現場は、時代の要請から、目まぐるしいほどに変革を求められている。AIやICT